

西田幾多郎の实在について  
——『自覚に於る直観と反省』を中心に——

飯森みのり  
(哲学・思想論分野)

本論文では、「西田幾多郎の实在について——『自覚に於る直観と反省』を中心に——」を研究主題とし研究を行った。論文の問題関心は、西田幾多郎の哲学の中において、「实在」として位置づけられたものはどのようなものであったかを探究することにあった。その探究を行うにあたっては、西田哲学全体を扱うのではなく、その中でも特に「自覚」の立場と呼ばれる、『自覚に於ける直観と反省』で西田が至った立場をその対象とした。「自覚」の立場における西田の思想は、「純粹経験」、「絶対矛盾的自己同一」などに比べ論じられることが少ない。しかし、西田哲学全体がその立場の移行にも関わらず、有機的に発展していることを鑑みれば、また、「自覚」の立場から移行してもなお西田が「自覚」という語を多く用いていることを鑑みれば、この「自覚」の立場の理解は重要なものである。そのように考え、論文では特に西田の「自覚」の立場を研究対象としたのである。また、問題探究の手がかりとしては、『自覚に於る直観と反省』を主要テキストとして用いた。

卒業論文の概略は以下のようなものである。西田は『自覚に於る直観と反省』において「自覚」という概念を用いることで、すべての实在に体系づけられた説明を与えようと試みた、というのが西田研究における通説的な理解である。論文ではまず西田を「自覚」という立場へ導いたフィヒテの「事行」概念とのフィヒテと比較することで、西田はフィヒテと異なり、「自覚」を経験的事実としていることを明らかにした。また自我だけでなく事物においてもそれが見られると述べている点においても、フィヒテとは異なっていたことを述べ、西田の「自覚」とは、最もシンプルな形においては、「同一律」として提示されると指摘した。さらに、その問題を論じたのちに現われる問題として、『自覚に於る直観と反省』における、存在としての繫辞の問題を取り上げた。西田の「自覚」の真相には、存在の二つの用法、つまり存在としての繫辞（「…である」）と存在命題（「…がある」）の結合があるのではないかというのが、その問題を提起した理由である。普通西田における繫辞の問題と言えば、「場所」以降にその著作に現われ、かつ研究されることが多い。しかし本論文では、その萌芽が、『自覚』において見られると考えたのである。論文における結論は、『自覚に於る直観と反省』における西田の「实在」とは、存在の二様態をもその中で包摂されるような一つの発展的活動としての「自覚」（同一律）であったと言える、というものであった。